

2022年10月22日

子どもの日本語教育研究会 研究企画委員会 Project-B

## 活動報告 読書会(3) 2022年4月3日 『思考と言語 新訳版』

### 第3章 シュテルンの心理学説におけることばの発達の問題

ヴィゴツキー,レフ.セミヨノヴィッチ著,柴田義松訳(2001)『思考と言語 新訳版』新読書社

第3章「シュテルンの心理学説におけることばの発達の問題」では、第2章で取り上げられたピアジェの学説と並んで世界の児童心理学界を支配してきたドイツの心理学者シュテルンの「児童の精神発達」および「子どもの言語」の研究について、ヴィゴツキー自身の観察や実験を基に、「人格主義哲学および心理学の限界、内部矛盾、学問上の破産、その観念論的本質」(p.97)がはつきりとあらわれていると、批判的に捉えています。

シュテルンは「意味づけ機能の真の成熟をもたらす複雑な道程全体を無視し」「ことばの発達過程に関する表象そのものを、無限に単純化」(p.100)しており、「本質的には何も説明していない」(p.101)こと、「子どもの言語的・文化的・知的発達全体にとって決定的な変革的モメントが、シュテルンによって正しく見出されたということに疑いはない。だが、それが主知的に、つまり誤って説明されたのである」(p.101)ことなどを指摘しています。

さらに、「シュテルンによる子どもの言語発達の段階に関する具体的説明」の「主知的性格・反発生論的傾向は、概念発達の問題とかことばと思考の発達における基本的段階の問題など、他の重要な諸問題の解釈にもあらわれて」(p.106)おり、「この特徴を指摘することによって、われわれはシュテルンの心理学理論全体、そればかりか、心理学体系全体の核心を示した」(p.106)と主張しています。

それらを踏まえ、「発達のすべての過程を、人格の自主的目的志向性から導き出す人格についての形而上学的思想が、人格とことばとの真の発生的関係を念頭におくときには、人格そのものの発達の歴史(そこではことばが最後の役割を果たすのではない)のかわりに、自分自身のうちから、自分の目的志向性から、ことばを生み出す人格の形而上学が創り出されるのである」(pp.107-108)と述べています。

本章では、この後の章でさらに詳しく触れられる内容に続くものとして、シュテルンの心理学説についてまとめられていました。本文の内容そのものからは少し外れてしまっていますが、個人的には既存の概念や学説に対する批判的思考の在り方に感銘を受けました。子どもの日本語教育学で一般的に述べられていることが、日々の実践において絶対ではない場面というのは必ず出てくると思います。そのような際に、これまでの理論を改めて批判的に捉え、その論拠を示していくことは、現場の人間として様々な実践に取り組む中で、とても大切であるということを改めて考えさせられました。シュテルンの学説について無批判に取り上げられることも多かった中で、批判的思考と各種の論拠を基にヴィゴツキー自らの考えが述べられていることで、シュテルンの学説についての理解が深まると同時に、この後の章で述べられる内容についての関心がより強まりました。

(河野)